

編集後記

編集長(ダン シロウ)

●編集長をしていながらこんな事を書くのも何だが、こう分厚くなると、とても全部読んではいられない。必然的に著者自身の責任校正である。よほどの問題記述でもなければ、ニュースレター拡大版位置づけのマガジンの内容は自由である。査読があるわけでも、評価を付与するのでもなく、個人に委ねるが故のややこしさも含み込んで、自由とはそういうものだ理解した姿勢である。

だから執筆者それぞれの理由で休載もある。ぜひ速やかな復帰を願う。その一方で連載48回目の方がある。考えてみれば分かることだが、12年間、同じ自分で居られるわけがない。人は必ず変化する。いくつになつていようと成長と言ってもいいだろう。その過程を記録している事になる。

マガジンという「場」が設定されたからこそ起こった事態。継続的な「場」を作るとは大したことで、「場」があったからこそ生まれた力があるのだ。是非、新たな方々の参加を！

●世の中の記憶は記録されたものだけが残る。記憶だけのものはやがて忘却される。個人のものであれ、社会の記憶であれ同じだ。だから記述して残しておかなければならない。

「世間はあの頃、口を揃えてあんなことを言っていた！」なんて事を、人間は繰り返してきた。それでも平気で生きているのは逞しい忘却力のたまものだろう。人は懲りない。だから忘れなために記録するのは、その事実に触れた者の責務だ。

●こう書いた二、三日後、ウクライナ侵攻なんて想像を絶する事象が起きた。いったい何時代の話だと思わずにはおれない。二年半前に訪問したあの美しいキエフが爆撃されている。あの街で暮らす人々にこんな厄災が降りかかるなんて・・・とも思ったが、歴史をひもとくとウクライナ国民はずっとこんな事態の中で生き続けてきた。地政学的必然という事らしいが、四方を海に囲まれて陸の国境がほぼない感覚の日本人とは、決定的な差なのだろう。

今、不確定要素山積みの事態を今日の記録者がたく

さん書いている。決着点によって選ばれた解説が、いずれ歴史的記述として残されるのだろうが、願わくば戦禍のこれ以上の拡大を回避できた記録であることを祈る。

編集員(チバ アキオ)

2010年6月から創刊。もうすぐ12年。マガジンも12歳。当時、幼稚園だった息子もこの春に家を出た。12年も経てば、人生のステージは変わる。特に若い頃は数年でガラッと変化する。スマホの普及が4%の時代から、90%の時代になったし、オンライン会議に関してはここ数年でも数倍の普及率で12年前は推して図るべし。

そんな中でも、存在し続けるのが対人援助のお仕事。何年後かに消える仕事にもカテゴライズされないともいうけれども、WEB上で済むようにする流れは常にある。さらに経済的事情による支援の退潮はマガジン編集部が活動する都市でも常に背中合わせにあり、その気配が消えたことはない。

そんな中でこのマガジンが扱うテーマでは、政治的に、金銭的に何かを獲得し実現する歩みの部分は少ない。中心的テーマは整わない側面もある状況の中で、いかに工夫し、やりがいを持ち、ともに高めていくかという姿勢である。生まれや学力も資本も関係なく、どんな人にも触れるチャンスがある。図書館活動の末端の一つといっても良い。こうした活動に参加していることに意義を感じるし、排除の仕組みや排除の力動から距離を置いていることがとても私にあっている。

戦火を国境や独裁者原因論だけで見るとはならず、どこに「境界」を見出すことができるか？も問われている。認知戦という言葉も用いられているが、どの国にいても割を食うのは庶民という現実がある。望まない砲撃、望まない従軍、望まない不便な生活。弱者から倒れ、命を落としていく…。正しさに魅了されている限り十字軍であり、そこからの脱却こそ、ソーシャルワークの歴史そのものである。現状をどう見ることができるか。そこにたけている私たちの役割は思った以上に大きいと思われる。そんな視点を複数もたらすこともできるのがこの対人援助学マガジンである。ここで起きているのは、世界で起きていることと同じ。世界で起きていることは支援の現場でも起きている。こうした行き来ができることが学びの面白みであり、喜びであり、希望である。だからこそ、手立てのアイデアがもたらせるのである。

今年度はオンラインを用いたマガジンきっかけ読書会、

トークライブを始めた。オンラインツールも活用である。12年前にはないものも用いてマイナーチェンジもしながら、これからはいろいろな工夫もしながら歩いていくことを強く思った3月編集作業だった。

編集員(オオタニ タカシ)

今号の編集会議では、直近のトークライブの振り返りをはじめ、ロシアのウクライナ侵攻という世界的な事象から個人の人生観・仕事観まで、本当に幅広いテーマが話題になりました。災害や戦争など、一たび重大な事態が生じてしまうと、援助職にできることなどちっぽけで、私たちが日々その意味を信じ、大切にしている営みも吹けば飛ぶようなものに思えてきます。一方、世の中が荒れると急に威勢のよいことを雄弁に語り始める人もいますし、時勢によっては、その語りに惹きつけられる人も少なくないように見えます。

だけど、それでも、自分自身やこの社会が不完全なものであると自覚しつつも、それでも、蛮勇を頼るのではなく、自分自身に起こせるちっぽけな良い変化を求めていきたいと思えます。今はまず、不戦の誓いを新たに。「戦争なんてものは、伝えられる生やさしいもんじゃない。戦争なんてものは反対だけしてりゃ、いいんだよ」(永六輔氏)

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町4-3-8

ランプラス二条御幸町4-0-2 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻48号

第12巻 第4号

2022年3月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第49号は2022年6月15日

発刊の予定です。

原稿締切2022年5月25日!

執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数も、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。 現在非会員で書いていただく事になった方には、[対人援助学会への入会](#)をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

2022年、春の「ぼむマンガ展」に出品した掛け軸マンガ「寿司」からのヒトコマ。

世間はすっかりuber eatsに様変わり。出前のおか持ちなんて死語になりつつある。

私の子どもの頃、にぎり寿司なんて日常生活のカテゴリーになかった。母が作ってくれるばら寿司、時々巻き寿司。そんなところだったろう。

それが持ち帰り寿司、回転寿司等、どんどんグレードアップで今に至る。

そして世界も寿司、生マグロを食するようになって、価格の高騰、資源不足がさやかれている。

黙ってひっそり食べていけば、ローカルな食習慣として競争相手も登場しなかったのに。

日本食を広めた結果、すっかり高級品になってしまったなんておかしな話が、あちこちに聞こえる。社会システムとはそんな風に組み上がっている。

団士郎 (2022/03/15)